

## 能<融>の[ロンギ]: 対話するワキとシテ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松井, 陽介 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/47773">http://hdl.handle.net/2297/47773</a>

# 能〈融〉の「ロンギ」

## — 対話するワキとシテ —

松井陽介

### はじめに

〈融〉後場は舞事後の「ロンギ」の段で終わっている。ここでは月  
にまつわる漢詩文的文辞の展開の後、姿を消すシテをワキが見送る  
内容となっている。

この「ロンギ」は地謡とシテが分担するが、地謡部分はワキの言  
葉であり、シテが去る末尾（ワキ視点の叙述）を除いては、二人の  
対話として書かれている。

本稿では「ロンギ」の対話としての意義を明確にしつつ、本曲を、  
対話劇としての視点からその主題や構成について考察する。

### 一 後場の「ロンギ」

後場の「ロンギ」は、シテの舞をうけて、ワキの、  
あら面白<sup>2</sup>の 遊楽や、そも明月の その中に、まだ初月の 宵々  
に、影も姿も少なきは、いかなる謂はれ なるらん

との問いかけに、シテが「それは西岫に」と答えるところから始  
まり、その後二人の対話は漢詩文的文辞のやりとりとなり、

特に後場の早舞の後のロンギは、『百聯抄解』の詩に基づく「水  
中の遊魚は、釣針と疑ふ、雲上の飛鳥は、弓の影とも驚く」を  
はじめ、漢詩文を背景とする文言を主体に綴られていて、月下  
に颯爽と舞うシテの人体に適合し、絶妙の効果を發揮している。

（表章「作品研究〈融〉」）

のように高く評価されている。また、

世阿弥の手になると思われるこの詞章は、漢代苑囿の模倣とし  
ての河原院に凝集された〈雅〉の美的理念を、漢詩文の構成力  
によって保証せんとしたものであったと言えるだろう。

（鳥居明雄「王権とトポフィリアー世阿弥と「融」」）

と漢詩文の意義を捉える見方もある。

では、なぜここでワキとシテは漢詩文を用いて対話を行なうのだ  
ろうか。そもそもこの舞の後の「ロンギ」はどういう場面なのか。  
まずは直前の舞事が舞われる理由を確認する。

9段「一七イ」は次のとおりである。

千重振るや 雪を廻らす 雲の袖 さすや桂の 枝々に、光を  
花と散らすよそほひ。ここにも名に立つ白河の波の、あら面白  
や曲水の杯、受けたり受けたり遊舞の袖。

「曲水の杯」とあるので、舞事は曲水宴における舞楽として舞つて  
いると理解できる。<sup>(5)</sup>

この舞事を含む後場の遊楽は、

・ 9 (段) シテの舞事 懐旧の遊楽遊舞 10 (段) シテの詠嘆

月に寄せる秋興の夜遊 (伊藤正義『新潮日本古典集成』<sup>(6)</sup>)

・ 融の亡霊(後ジテ) が往事の姿で現われ、中秋の名月のもと、  
かつての籬が島での遊宴を再現して舞い、僧とともにその美景  
を愛惜し、月の都へ帰ってゆくのだった。

(天野文雄『能を読む2』<sup>(7)</sup>)

などと解釈されるのが通例といつてよい。ただ、シテは本文中で、  
遊楽遊舞が生前の再現であると明言はしていない。観客の目には再  
現に見えるかもしれないが、シテが僧の回向を求める為に出現して  
いるのではなく、懺悔として過去を語ったり再現する場合のシテと  
は、本曲は区別すべきである。また、この舞事が曲水宴の舞楽であ  
るなら、本来三月上巳の行事をなぜ八月十五日に行なわせているか  
という点も不明である。

ここで舞事と「ロンギ」のつながりを考えてみたい。三宅晶子氏  
は舞事を「かつて自分が行なった曲水の宴での舞楽の再現」としつづ、  
〈高砂〉を例に、

神能はすべて同様で、器楽舞によって長時間の中断があること

をあらかじめ予定して作られており、舞の前後に置かれる詞章

に、意味的連続性を持たせない配慮がなされているのである。

〈融〉も舞直前は「受けたり受けたり遊舞の袖」で、そこで意味  
的に終結して、舞の後は改めて「あら面白の遊楽や」と始まっ  
ている。<sup>(8)</sup> (三)道 期の世阿弥と(松風)の舞)

として、舞事と「ロンギ」の間に区切りを認めているが、それでは  
曲水宴が舞事の理由づけだけの為に便宜上持ち出されたように見  
えてしまうことは否めない。

私見では、ワキが「あら面白や」と感想を述べているので、舞事  
から「ロンギ」は自然に引き続いていると考ええる。ただ、直後に「そ  
も明月のその中に」と、ワキが話題を転換しているように見えるこ  
とが、このつながりをわかりにくくさせている。

対話部分に入るとシテは詞章に即した所作を行なうが、(曲のみど  
ころとして評価が高いこともあってか)それをシテが引き続き舞い  
を舞っているとする解釈もある。器楽舞と「ロンギ」中の所作とを、  
劇中の一連の舞として捉えることには慎重な検討が必要かと思われ  
るが、場面のつながりを認める点においては賛同したい。舞事の後  
も曲水宴の場面が続くと解釈するのである。とすると二人の対話は、  
曲水宴における詩作または披露と位置付けられる。二人が突如語り  
出す漢詩文的色彩の対話は、実は宴中の詩作の當為をそのまま表し  
ているとすると、舞事からの流れがうまく説明できるのではないだ  
ろうか。

世阿弥は「曲水の杯」という語句を使って、月下の舞楽と、披露  
としての漢詩文的文辞の展開を可能にした。曲水宴には季節外れの

弊もあるが、いったん「青陽の春の」と中秋から大きく離れた漢詩の内容は、月を叙する流れから「鳥は池中の樹に宿し、魚は月下の波に臥す」と、目前の情景に視点を戻すことであまり収められている。以上の解釈では、通常ワキ・シテの対話が主となる前場同様、本曲では後場も対話が劇の進行上の重要な役割を担っていることが確認できる。天野氏は、

美的生活への懐旧を、融と僧との心の交流をもって描いている点がユニークである。(中略) このような融と僧の「交感」は、5(段)にも認められ、10(段)にいたって頂点を迎える。ロングの「一輪も降らず、万水も昇らず」は、教える者と教えられる者との心の交流を意味する「感応道交」という仏理を示す言葉でもある。<sup>10)</sup>

として、二人の「交流」に注目している。また、「カラ―百科 見る・知る・読む 能五十番<sup>11)</sup>」では、舞の後の対話を「その後僧との間で三日月に関する問答を交すのも面白い趣向です。」として、この部分を丁寧に紹介している。

このように「ロング」の対話の意義を二人の交流として評価する見方は既にあるが、対話を曲水宴での披露と捉える見方は、漢詩文的色彩の必然性や曲の構造の面からも、この評価を補強するものと考ええる。

## 二 軽視されてきたワキ

【謡曲大観<sup>12)</sup>】の現代語訳においては、「ロング」全体の話者を「融」

としている。同書下段の訳出部分から「ロング」の最初と最後を掲げると、

融「あ、面白い遊楽だ。さても——」

月は明るいものなのに、まだ宵の間の三日月の、(中略)

その光陰に誘はれて、月は都に入り給ふ。あ、名残惜しい面影だ<sup>13)</sup>

と謠ひ舞つて、月の入るを惜しむと思ふうちに、融自身も月界の人となる態で退場。

と、本来ワキの感懐であり視点であるべき箇所も、シテの言葉に置き換えられてしまっている。ここまででないにしても、例えばこの段を「大系」が「シテの詠嘆〓秋の夜の叙景」とする概括も、間接的にワキの存在意義を軽視してしまっている例として挙げられよう。こうした傾向は「ロング」に限ったことではない。

・ この「融」のワキも、もっぱらシテの「物語り」を引き出すだけの役目である。(小山弘志『謡曲・狂言・花傳書<sup>14)</sup>」)

・ そこでワキの方から籬が鳥のことを言い出すのがやや唐突の感を与えることは否み難いと思われる。(表章 前掲論文<sup>15)</sup>)

・ ここでワキ僧が所に寄せての懐旧をわが身の上のこととして詠嘆するのはいかにも不自然である。(中略) ここでの懐旧は、むしろシテの側のものであるべきであらう。

(伊藤正義「融(統々)——しもんにうつる月影<sup>15)</sup>」)

『大観』を含めこれらの論評に共通するのは、曲の主題や構成に關するワキのはたらきかけは本来限定的であるはずとする見方ではないだろうか。

平井修成「融」試論―源融の伝承と能の構造―<sup>16</sup> においては、「名所教え」の考察の中で、

結局のところ、「見え渡りたる山々はみな名所にてぞ候ふらんおん教へ候へ」というワキの興味は、河原院への興味とは無縁なところから発せられていると想像されるのである。(中略) ワキとしての役割の埒外へ、自ら踏み出してしまっているのである。

と、ワキの言動を本曲における「逸脱する能形式」の一つとして捉えている。(融)のワキは第一章で見たような対話をシテと交わす何らかの個性を有していることは確かであろうし、だからこそ「二人の交流」という側面を重視する見方もなされているのである。ワキ造型の特徴については次章以降で確認してゆく。

では、後場「ロンギ」の対話的側面を切り捨てて、シテを一元的に中心視した視点で捉えた場合、この部分はどう解釈されるであろうか。宴中の披講としての構造上の意義は認められなくなるので、解釈は漢詩文的文辞によって謡われる内容そのものに求めることになる。一曲が月の運行に従い構成されていることを背景に、月尽くしの文言からは、

・融の大臣の美的生活の懐旧と、月の讚美・憧憬を描く。

(岩波「新日本古典文学大系」<sup>17</sup>)

・融の霊が舞った六条河原院の美しさは、「光を花と散ら」しつつも、宇宙の根源につながる趣きをもつ。(相良享「世阿弥の宇宙」<sup>18</sup>)  
・月を称えるその舞はいつしか、時制をこえた永遠の月そのものの賛歌へと昇華されていく。(中略) 変化し続けつつも永遠に空にある月の様相と、その姿に反応する宇宙の万物の姿とを称え

舞う、月の仙人の姿に他ならない。(竹内晶子「世阿弥の月」<sup>19</sup>) などに見られるように、「月への讚美」から「宇宙の摂理」にまでつながっていくような主題論が引き出されている。

本稿ではワキを重視し、ワキとシテの対話から見えてくる(融)の別の側面について、さらに探ってゆく。

### 三 「名所教え」と前場の「ロンギ」

前後両場を「ロンギ」で終わる曲は、他に〈高砂〉〈志賀〉〈難波〉〈放生川〉〈弓八幡〉が挙げられる。これらを含め前場を「ロンギ」で終わる多くの曲では、「クセ」などの段をうけて「ロンギ」で曲調を変えたと共に対話の形式を取り戻し、中入りに到るといふ類型が見られる。しかし(融)の場合は独特の特徴がある。

中入り前の「ロンギ」はワキとシテの対話(地謡がワキの台詞を代行)として始まるのが定型でありもちろん(融)も同様だが(融)では、5段冒頭からの「問答」「哥」がいわゆる「名所教え」としての対話であり、そのまま「ロンギ」の対話へと続いている。

「名所教え」の評価についていくつか取り上げておく。

・この〈物尽し〉は、〈語り〉の終段の哀傷をがらりと変える効果を持つが、それは、古えの〈風景の詩法〉を同時代的に書き直したものであって、「千賀の塩竈」などというほとんど意味作用の内実を失ったばかりでなく、詩語としてもひょっとしてこの河原院の廃墟に等しいものとなってしまっているかも知れぬ(風景)を、現実の都の〈風景〉——しかも月光によって詩的に変

容した（風景）の臨場感によって、再活性化しようとする仕組  
みだと考える。

（渡辺守章「融 廢墟の夢、夢の廢墟」）  
・旧主不在の歎きを受けて、その充足に向けて旧主の融を招き寄  
せる場となる河原院のアイデンティティをまず確保しようとする  
のが、このパノラミックな名所教えの意味である。

（鳥居明雄 前掲論文）<sup>14</sup>

・ロンギは、位置は中人前だが、実は「金札」「養老」「求塚」な  
どに類した中心部のロンギと見るべきで、内容も物尽くしに準  
じている。

（「大系」）

・歌物語が本説だけに、〈融〉の前場には和歌的色彩が著しい。語  
り後の名所教えが（他曲のそれと同じ場合が多いが）実質は歌  
枕教えに近く、和歌的文辞で彩られている点などが、その顕著  
な例である。

（表章 前掲論文）<sup>15</sup>

本章では、劇の内容面、構成面から右のように評価されている「名  
所教え」が、なぜ「和歌的文辞で彩られ」、また「潮波み」の場面へ  
とつながるシテの高揚感を引き出しているのかについて、劇中の必  
然性を確認する。

先述のように「名所教え」は全て対話として構成されており、「和  
歌的文辞で彩られて」といっても、全ては会話文中における発  
話である点に注目したい。当然、これらの文辞は文飾として用いられ  
ているのではなく、ワキ・シテ兩人の関心事として話題に上ったも  
のと考えられる。

「名所教え」を請うとワキは、自分の方からすぐに、「音羽山音に  
聞きつつ逢坂の関のこなたにと詠みければ」と和歌を引いて質問す

る。シテは和歌の内容を繰り返しつつ、（逢坂山は）「この辺りより  
見えぬなり」と説明する。この後ワキの重ねての要請「名所名所を  
語り給へ」に対しシテは、

語りも尽くさじ言の葉の、歌の中山清閑寺、今熊野とはあれぞ  
かし

と続ける。この部分の解釈として例えば「集成」頭注では、

話していると言い尽くせない、の意に、「言の葉の散り失せずし  
て」（『古今集』序）や「詠むとも尽きじ」（同）をふまえた「歌  
（の中山）」の序。

と説明している。もちろん異論はないが、ここで現代語訳として、  
名所を「語りも尽くさじ」と、地名の「歌の中山」との間を区切っ  
て解釈することには異を唱えたい。<sup>16</sup>

この時点で既に二人の間で和歌が関心事となつていることは「音  
羽山」歌の件からも明白で、シテの言葉の訳としてはまず、「語りも  
尽くさじ言の葉の、歌」の「名所にまつる歌には事欠きませんよ」  
という意と、その後が続く「歌の中山」以下の景色の説明とを読み  
取るべきであろう。自ら和歌を引き合いに出す程のワキに対し、「和  
歌の名所ならいくらでも教えましよう」とシテが応じた形で、兩人  
が和歌を話題の中心に据えることを了解したことを示している。以  
後シテの側からは、徹底的に和歌が引き合いに出されるのである。

「物尽くし」に準じる形態を備えているが、作者は登場人物同士の  
了解による対話の必然によって「和歌的文辞」を連ねているのであ  
る。兩人の了解は、「問答」の最後に後成歌「夕ざれば」を一句づつ  
交互に詠むに到って一気に深まる。融没後三百年、応永から遡るこ

と二百年の名歌の詩境が二人にしみじみと共有されるのである。

「ロンギ」後半にさしかかると、シテは「興に乗じて身をばげに忘れたり」と我に返るが、舞台を見れば明らかのように、シテは一人で「興に乗じ」たわけではない。ワキとの対話、詩興の交流がそうさせたのであり

・ それを知るべに御覽ぜよ

・ あれこそ（中略）深草山よ

・ あれこそ大原や 小塩の山も今日こそは、ご覽じ初めつらめ、  
なほなほ問はせ給へや

と、情感のこもった言葉が重ねられていく。第一章でみた後場「ロンギ」の漢詩文でのやりとりも、こうして丁寧に描かれた二人の交歓をふまえてなされたわけである。

「名所教え」は、劇中対話としての必然性を確保しつつ「物尽くし」に準じた聞かせ所とし、さらには、

（語り）によつて「物語」の本質を提示し、次いで（歌）によつて、「興に乗じて身を忘れる」状態にまでシテをもつて行き、そこで、忘我・恍惚のうちに「潮汲み」をさせるといふ、虚構の内部での現実と虚構の相乗作用を、実に巧みに操作することによつて、この虚構の組み込まれている舞台空間そのものを幻想の空間に変容させてしまう仕組みは、見事と言ふ他ない。

（渡辺守章 前掲論文<sup>20</sup>）

と評される構造的性を有して長大な規模となった。

「大観」の概評には、

たゞ第5・6節に近郊の名所を長々しく叙したのは、「田村」な

どの場合ほどふさはしい感じを與へない。

として否定的見解をとっている。ワキとの対話の内実や感情の描写を読み取らず、規模の大きさを過剰と捉えたのであろうか。前掲平井論文<sup>16</sup>では、「名所教え」におけるワキの役割の「逸脱」が指摘されているが、氏が示唆するようにこの「逸脱」は本曲の特色、つまりは作者の意図であり、そこにこそ二人の交流と感情の描出がなされているのである。

こうして用意されたシテ心情の高揚において、前場最大の見せ場とされる「潮汲み」が行なわれ、さらには後場の遊舞がなされるのである。

#### 四 ワキの造型

ワキは「名所教え」で積極的に教えを請い、和歌を通じての共感  
はシテの心情を高揚させた。3段の、賈島詩の詩境に自らを擬えた  
述懐も、シテの、

只今の面前の気色がお僧のおん身に知らるるとは、もしも賈島  
が言葉やらん

という反応を引き出している。第二章で見た「さてはあれなるが  
籬が鳥候ふか」が、「いかにも唐突」に見えてしまうのは、一般的に  
は受身の姿勢で「シテの「物語」を引き出す」役目を担うと考えら  
れているワキの方から、対話の中でその後話題になって行く材料を  
持ち出しているからであるが、（融）における二人の対話は、むしろ  
ワキの側から話題が提供されるように作られている。

・いかにこれなる尉どの、おん身はこの所の人か

・さてはあれなるが籬が鳥候ふか

・古秋に帰る身の上かと、思ひ出でられて候（以上3段）

・塩竈の浦を都に移されたる謂はれおん物語り候へ

・いかに尉どの、見え渡りたる山々はみな名所にてぞ候ふらんおん教へ候へ

・音羽山音に聞きつつ逢坂の、関のこなたにと詠みたれば、逢坂

山も程近うこそ候ふらん（以上4段）

・そも明月の その中に、まだ初月の 宵々に、影も姿も 少な

きは、いかなる謂はれ なるらん（10段）

3段においては、ワキの最初の質問に対して、「この所の潮汲みにて候ふ」以下「あら何ともなや」「河原の院こそ塩竈の浦候ふよ」「潮汲みなど思さぬぞや」などと、シテは強い口調で応じている。例えば〈忠度〉の前シテに似た、頑固な老人像が思い浮かぶ。ところが曲の流れはシテ主導ではなく、ワキの言葉をきっかけに展開していくように作られている。先に挙げたような、ワキの興味・関心から発せられた言葉によつてである。

賈島詩や「音羽山」歌など、ワキが少なからぬ知識を有していることは明らかであり、前後「ロンギ」を始め曲全体においてシテとの対話を行いかつ交流を深める基盤として機能している。もちろん作者の意図とみなすべきで、〈融〉という作品を鑑賞するにあたっては、こうしたワキの特質を、ワキの発する言葉とおりに受容すべきである。

## 五 シテの心情とその変化

ワキとの対話の冒頭では頑固なシテ像が提示されるが、対話の流れはワキが主導していることを確認した。その流れの中で前シテの心情の揺れは細かに、また大きな振幅をもつて表現されている。

「曲趣にそくわぬ（前掲表論文）」ようにも受け取られる3段の悲嘆、その後「潮汲み」に到る「名所教え」での高揚。その表現に重要な役割を果たしているのが、前シテの風景の捉え方の特殊性である。先に引用した渡辺論文をはじめ言及されることの多い特色だが、ここでは谷口聡美氏の「能「融」における二つの月」からの指摘を掲げる。

・「河原院」には、時が流れても失われることのない「塩釜の浦」の観念世界が連結されているのである。たとえ「コビー空間」が年月を経てその様子をもちくずしても、コビーされるべき、本体のイメージは決して消えることなく、「コビー空間」に生き続けている。従つて「コビー」と「本体」の関係は永遠に成立し続ける。これもまた「河原院」独特の時空間的性質だと言えよう。

・シテの老人が「寂しい」と感じているのは、実は詞章のとおり、「塩釜の浦」という彼の内的視界にある海浜の風景なのであり、実景の「河原院」とは異なる。

・シテの「河原の院こそ塩釜の浦候ふよ」という発言は、舞台空間の二重性を明快に言い切ったもので、明らかに二枚の絵がそこに存在することを悟らせる劇的宣言なのである。そしてこの

二枚が重なり合うことで舞台空間は変幻を見せ、劇的な高まりが生み出される。

シテの風景の捉え方はそのまま心情の有り様を表していると考えられる。谷口論文の理解に基づきながら、心情の流れを整理してみる。2段のシテの独白は、まずは曲の季節・時間・風景・シテの様子が提示される部分である。

月もはや、出潮になりて 塩竈の、うら寂び渡る 夕べかな。

と、シテ謡を聞く限り限りまったく海辺の風景であり、「げにや移せば塩竈の、月も都の最中かな。」でようやく河原院であることがわかるが（予備知識がなければ3段の説明までは理解できないが）、続く詞章を聞いても「潮馴れ衣袖さむき、浦曲の秋の夕べかな」と、浦人としての述懐に終始している。谷口氏は「もつともこうしたシテの内的風景は、他者との〈問答〉の中で揺さぶられ持続しない。」として、ワキとのやりとりの中で「シテのしている観念としての景色」と「シテ以外の者が見ている実景」との相互作用について論を進めている。本稿では、シテの心情に焦点をあてつつ、それが詞章上にどう反映しているかを確認してゆく。

2段では古いの嘆きは語られるものの、河原院そのものに対するシテの感懐は表されていない。シテは純粹に浦人として存在しているようであり、その姿勢は3段でのワキとの問答が始まっても崩れない。「河原の院こそ塩竈の浦候ふよ」と言い切り、「離が島」の話題に移っても、「こ酒宴の遊舞さまざまなりし所ぞかし」と、融の事蹟も客観的態度で説明しているように見える。

こうした「この所の潮汲み」としての会話に変化が生じるのは、

ワキが賈島詩に身を擬えた発言によってである。シテの「もしも賈島が言葉やらん」の発言は、自らを「潮汲みとなど思さぬぞや」と強弁した老人の口をついて出たことで、詩境を解する意外な一面が浮上してきたように観客には受けとめられる。世阿弥の好む手法である。二人が詩境を共有した直後の「上ヶ哥」では、

いざわれも 立ち渡り、昔の跡を陸奥の、千賀の浦曲を 眺め  
んや

と、シテの視点の変化が示される。「いざわれも」の「も」には、風景に詩境を感じたワキに続いて自分「も」そうしようとするシテの意図が読み取られる。「昔の跡を陸奥の」には懐旧の心情がうかがわれるが、客観的態度はまだ持続しているようである。風景についても、まだ塩竈の浦を幻視している。

4段の「語り」で庭園の「謂はれ」を客観的に語り出して行くうちに、「しかれどもその後は」とシテは客観的事実を述べてしまい、「されば歌にも」と貫之歌に共感するように、今度はついに「げにや眺むれば」と目前の現実の荒廃ぶりに直面する。ここに到ってシテのしている景色は激変し、その度合いに見合うかのような強い悲嘆が、「あら昔恋しや」以下に示される。

「名所教え」では、先述のごとく対話のうちにシテの心情は高揚していく。この間河原院の景色は全く触れられず、「さす潮時もはや過ぎて」いることにシテが気づいた時には、いつの間にかシテの見る風景は、当初の潮の満ちた塩竈の浦へと戻っている。

ワキはシテが潮を汲む様を目撃し、「潮曇りにかき紛れて、跡も見えずなりにけり」と見失う。

池の水は干れているから、潮曇りはあるはずがない。だが老人も、またワキの僧も、月光の下、往時の六条院の幻想の中にいるのである。  
(相良享 前掲論文<sup>(18)</sup>)  
となるのである。

前場のシテの視点と心情の変化を概観したが、こうした変化をシテ自身が「興に乗じて身をばげに、忘れたり」とはつきり認めている。「忘れ」ていたのは2・3段で示された「身」、つまり「潮汲み」老人であることであり、これが前シテの基本的立場であることが再確認できる。と同時に「興に乗じ」ることが本分ではないというシテの意識も確認できる。

前シテは「潮汲み」としての立場から、「身をばげに忘れたり」と自らを顧みた。しかし後シテは登場するや「忘れて年を経しものを」と語る。この場合「忘れて」いた内容は、もちろん前シテの言う「潮汲み」としての「身」ではなく、「興に乗じ」ることの方であり、詩興・風流を忘れ浦人としての時間を長く重ねていたことを「忘れて年を経し」としている。

この「年を経し」ことは、前シテ登場段の「古い」への述懐が、「古い」を季節の推移に擬えて表現されていることと相通じているように思われる。

シテ登場段は場面設定上の叙述が必須だが、同時に、長い年月を浦に暮らしているというシテの状況（つまりは庭園の長い荒廢の年月の比喩）を示していたことが、「年を経し」の言葉で再確認される。

ここで2段の引用歌「水の面に」について触れておく。この歌はもともと屏風歌であり、上句の視覚的印象が鮮やかで解釈でもそれ

を重視することになってしまいが、2段での引用の場合、「照る月並みを数ふれば」は、目前の波を見て今宵の日付けを知ると解するよりも、日毎日毎に水面の月が満ちていくのを数えながら今日の十五夜を迎えたと、長い時間の経過の意を汲んだ方が、直後の「古い」の述懐の内容にもつながって適切かと思われる<sup>(20)</sup>。

つい詩興に乗じたがあくまで「潮汲み」老人であった前シテとは反転して、詩興・風流を取り戻している後シテは、自らを「遠き世にその名を残す公卿 融大臣とはわがことなり」と名乗る。そして夜明けまで、ワキと曲水宴に興じて姿を消す。

## 六 構成

前シテの心情の機微を描くにあたっては、劇の構造として次のような特徴が挙げられる。

・シテの幻視する風景と現実の風景との、二重の風景のずれを利用する。

・月の運行を曲に取り入れて時間軸をつくり、その経過の中で心情の変化を描く。

・ワキの言動主導で対話を構成し、ワキの言葉に反応し変化するシテを描く。

こうして前場はきわめて構造的に作られている。そしてシテの心情を動かす力となっているのが、詩興に乗じ通じ合う二人の交歓である。

一つの詩歌を二人が共有する場面は三ヶ所ある。まず3段の買島

詩。ここで通じ合った二人は5段で俊成歌を味わい、そして後場「ロ  
ンギ」「青陽の春の始めには」以下で漢詩をやりとりしつつその世界  
に浸る。その結果がワキの「あら名残惜しの面影」という感懐であ  
る。この言葉は1段の「夕べを重ね朝ごと、宿の名残りも重なりて」  
に対応している。旅するワキの度重なる別れのうちの特別な一夜と  
しての八月十五日であったことが示されている。

〈融〉にはこの他にも、様々な対比・対応関係が組み込まれている。  
月や潮に関する事項はもちろんのことだが、和歌と漢詩の対比、「身  
をばげに忘れたり」と「忘れて年を経しものを」の対比、「遠き世」  
と「千賀」などの古今の対比、買島詩や後場「ロンギ」漢詩文中の「鳥」  
と「魚」、「空」と「水中」の対比等々枚挙に暇がない。

また、4段「語り」後のシテが悲嘆に沈む場面については、三苦  
佳子「能「融」の構造」において、8段「サシ」との間に、「月のみ  
満てる塩竈」と「返る波の満つ塩竈」「老の浪も返るやらん」と「ま  
た古にかえる波」の語句の対比などを挙げて、「二つの場面对応す  
るように作られているのは明らか」としている。

「構成・詞章ともに極めてゆきとどいた作である。」（『大系』）と評  
価される本曲であるが、さらにもう一つ、曲の大きな枠組みが示さ  
れている事例に言及したい。

1段でワキは「千里も同じ一足」と、都から遠く離れた地を出  
立する。そして河原院で出会った二人は「今日目前の秋暮」に「古人  
の心」を認める。ここでは詞章上には出てこないが、「二千里外」を  
想起すべきであろう。シテが「古人の心」と言う時、古今の対比と  
ともに「二千里外」と「目前」の対比も兼ねているのである。

「千里も同じ一足」を重ね都へやってきたワキと、「遠き世」から  
今の河原院に出現したシテとが、時間・空間の隔りを超えて邂逅し、  
詩興を通わせ交流し別れていく一夜を描く——これが、「ワキとシテ  
の対話劇」という視点から見た本曲の主題である。

### おわりに 「懐旧」と「月の住人」

〈融〉を語る場合に「懐旧」という語が頻出する。しかし曲中シテ  
がはつきりと懐旧の情を示している箇所は意外に少ない。シテは日  
前のワキとの交流に心をたかぶらせる。シテの過去についての言及  
すべてに「懐旧」の情を見る必要はないと思われる。

しかし「懐旧」が本曲の主題ではないとするわけではない。〈融〉  
を見た観客の多くが往時の河原院に対する「懐旧」に似た感情を抱  
くと思われるからである。天野氏が「美的生活への懐旧を、融と僧  
との心の交流をもって描いている点がユニーク」と評し「交流」に  
焦点をあてたことで、「懐旧」の中身も問われることになった。「懐旧」  
はシテよりも観客の側に多くあるのではないだろうか。

後シテの「月の住人」説については、「月の都に入り給ふよそほひ」  
という言葉が、ワキの持った印象の述懐程度の意味にも取れること  
から、例えば〈江口〉におけるシテの正体の判明とは別次元のもの  
と考えた方がよいように思われる。「月の住人」というシテの属性を、  
ワキが「月の都に入り給ふよそほひ」と発する前のシテに対してあ  
てはめて言及するには慎重を要すると思われる。

「懐旧」や「月の住人」といったキーワードを除いたとしても、〈融〉

には充分な魅力があるように筆者には思われる。本稿で取り上げた「対話劇」の視点からは、現在能に似た面白さが多く汲み上げられるからである。

注

- (1) 藤田隆則『能の多人数合唱』(ひつじ書房二〇〇二年)第5章「ワキは多人数合唱にどのようにかかわってきたか?」に「ロンギ」へのワキのかかわり方への論者があるが、本稿では台詞の内容がワキの発言であることを確認するにとどめる。
- (2) 以下本文からの引用は、岩波日本古典文学大系『謡曲集上』所収の下村謙語本による。
- (3) 『観世』47・8、一九八〇年八月。
- (4) 『日本文学』、一九八九年六月。
- (5) (3)の表論文に「曲水宴に遊舞する融を登場させている。(中略)歌・舞の二曲を重視する世阿弥の芸論がそのまま実現されている形である。」とする。
- (6) 新潮日本古典集成『謡曲集中』
- (7) 『能を読む②』角川学芸出版、二〇一三年。
- (8) 『歌舞能の確立と展開』ぺりかん社、二〇〇一年。
- (9) 大和田建樹『謡曲評釈二輯』(博文館、明治四十年)頭注「そも明月の其中に」の項に、「是より月の事をさまざまく述べて舞の餘興とす。まだ舞ひつゝあるなり。」とする。
- (10) (7)の「融」小誌。

- (11) 小林保治・石黒吉次郎(勉誠出版、二〇一三年)。
- (12) 田中成行『融』の場——河原院の聖天信仰——(中村格『能の背景』(能楽出版社、二〇〇五年)所収)に、「風流の友」としてのシテとワキについて詳細に論じられている。
- (13) 佐成謙太郎(明治書院、一九三〇年)。
- (14) 日本古典鑑賞講座第15巻。
- (15) 『謡曲雑記』(和泉書院、一九八九年)所収。
- (16) 『常葉国文』25(二〇〇〇年十二月)。
- (17) 西野春雄。
- (18) ペリかん社、一九九〇年。
- (19) 「世阿弥の月——融——(姨捨)——(江口)——(井筒)——」にみえる反復と混淆——(『天空の文学史 太陽・月・星』三弥井書店、二〇一四年)所収。
- (20) 『国文学』25・1、一九八〇年一月。
- (21) 「語り尽くすこともできないが、歌の中山・清閑寺・今熊野というのはあれである。」小学館『日本古典文学全集の訳出例』
- (22) 島津忠夫『世阿弥能作と和歌——融を中心に——』(『能と狂言』12、二〇一四年七月)には「歌の中山」は、古歌には見られない。諸注も和歌を注記していない」とし、『持為集』と『草根集』から一首づつ使用例を挙げている。
- (23) 風巻景次郎『日本古典読本8謡曲』(日本評論社、一九二八年)には「名所教え」について、「かうした説明は何も旅僧の態度の写実であるわけでなく、ただ地方人の多い武人社会の者にとって、その文学趣味を満足させてくれる好都合な舞台技巧で

あつたわけであらう。」とある。

(24) 三宅晶子「融」の引き歌考」〔文学〕3・5、二〇〇二年九月、十月）や（18）の相良氏の論考。

(25) 『湘南文学』一九九六年三月。

(26) (24)の三宅論文は「水の面に」歌について、「場面設定のなかに埋め込む配慮がうまくなされていないために、必要ない意味まで生かしてしまっているように思える。」としているが、筆者もこれに賛同する。

(27) 『東海能楽研究会年報』12、二〇〇七年度。

(28) 「構成」については同意見だが、「詞章」については(24)の三宅論文に多くの指摘があるように、「未消化な部分」も認めざるを得ない。

(29) (12)の田中論文にも、「古人の心」についての言及がある。

(30) 『集成』頭注には、「姿を消すことをその月の都に入ると寓した。」として、シテが月へ帰ったとの断定はしていない。